

計画演習ⅠB

CAMPUS × ARCHITECTURAL STUDIOS

13

開講年次：学部3年生第4クオーター

[担当教員]

中江哲（鹿島建設） 小幡剛也（竹中工務店） 本田孝子（日建設計）

浅井保（助教）

[Teaching Assistant]

旭智哉（A69） 小野原祐人（A69） 柴田貴美子（A69）

■課題概要

敷地は六甲台第2キャンパスの東側、馬場を含む工学部キャンパス北側の土地。ここに建築教育施設、建築の周辺にかかる情報の発信拠点、そして工学部キャンパス東側の玄関口となる複合施設を計画する。工学部の学生数は総数で約2450人、工学研究科大学院生が約300人、190人の教職員が在籍している3000人規模のコミュニティである。ここで研究・勉学・創造を行う人々が建築やそのインフォメーションを介することで創造的コミュニケーションが生まれ、多様なアクティビティが可視化される場所。このようなイメージを顕在化させる、唯一無二の、ここにしかない磁場を創造することが本課題の趣旨である。

■附帯条件

教育施設は建築学科に所属する学部生、大学院生、社会人、研究者、教授らが主たる利用者。また工学部キャンパスを利用する学生、教員、訪問者にとって NEW NORMAL 時代のキャンパスライフを支援する空間および、現有の情報基盤センターの空間を確保すること。それぞれの機能は独立することなく輻輳する形態をもつコンプレックスとすることが望ましい。建蔽率・階数は規定しない。但し、周辺環境に配慮したものとし、ランドスケープデザインも建築と同様の地平で思考する。施設の延面積は8,000m²程度。

■計画要件

1. キャンパス共用施設（計1,000m²程度）

広場、コモンズ、インフォメーション、ショップ、事務管理、WC、倉庫他

2. 教育施設

スタジオ 400 m² ×2、デジタルファクトリー 200 m²、講義室 80 m² ×4、150 m² ×2、300 m² ×1、研究室 25 m² ×30、会議室 30 m² ×3、50 m² ×2、100 m² ×1、資料室 250 m²、レストルーム、シャワー、ランドリー他

3. 情報発信施設（3,000 m²程度）

ホール・ステージ 600人収容、ホワイエ、レセプション、ライブラリー、ワークショッピングルーム、建築模型展示室、デジタルアーカイブ 他

+コミュニケーション施設（自由設定）

*なお、現在キャンパスの歩行者ネットワークを形成する「うりぼーロード」は再設計し、計画内に含めること。

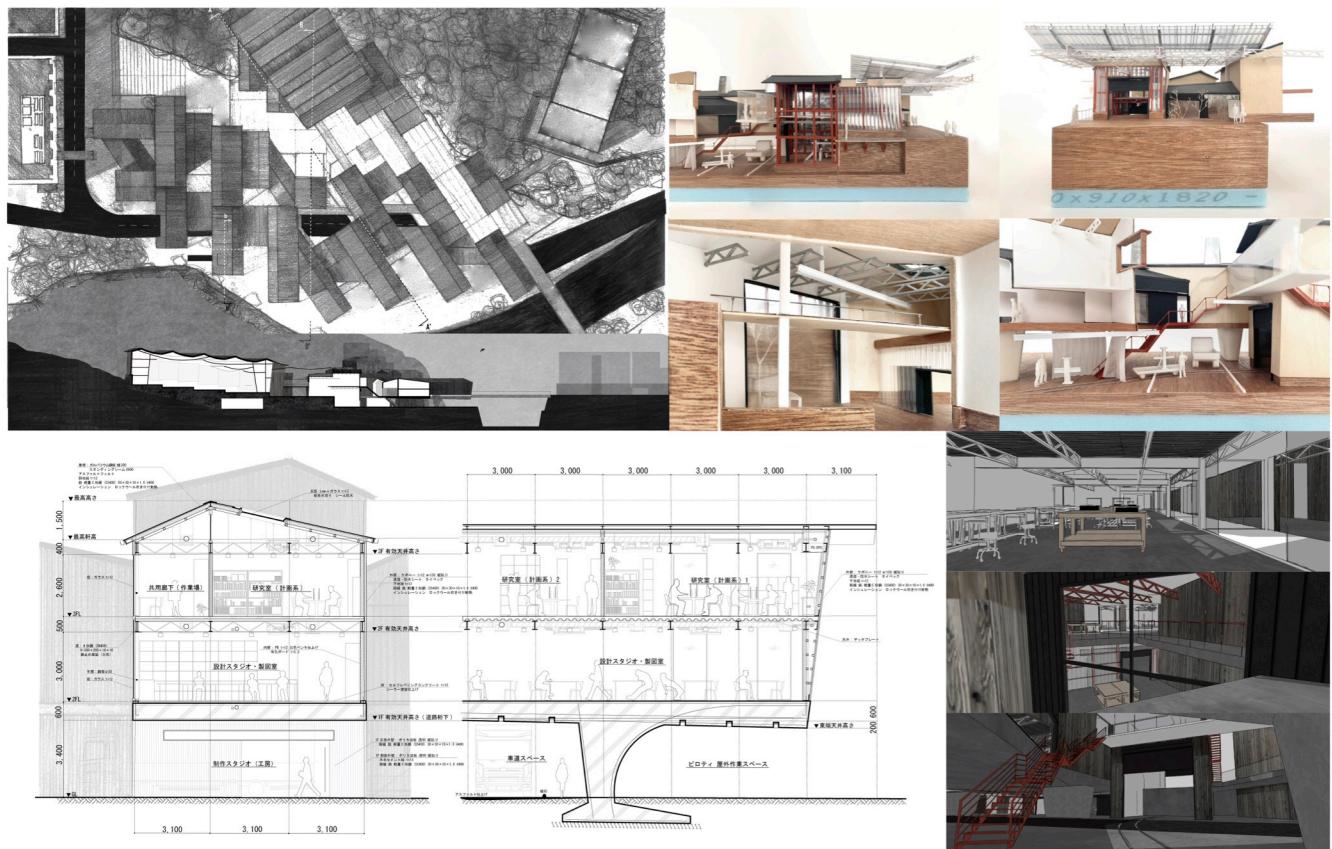


課題敷地

紺色に染まる紺屋の袴

長央尚真

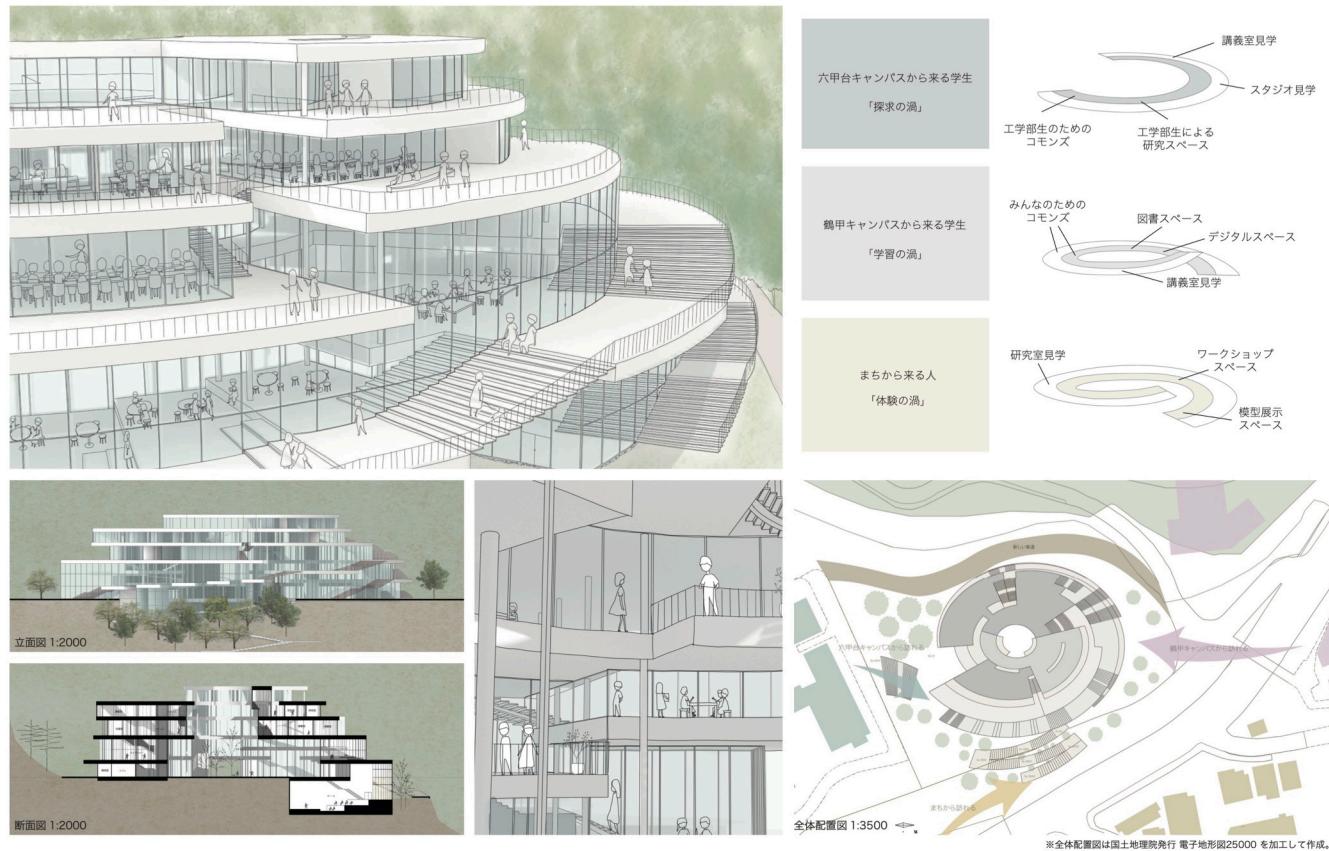
建築は、扱う部材が大きくそれらのサイクルは平面的に行われるためスケールの大きさに対し、外部にその様子はあまり見えない。本計画では敷地の持つ約4mの高低差を活用しそれらのサイクルを立体的に配置する。そして、水平方向に伸びる通路が、サイクルを繋ぎコイルのような活発な磁場を発生させることを期待する。



渦でつながる

加藤千悠

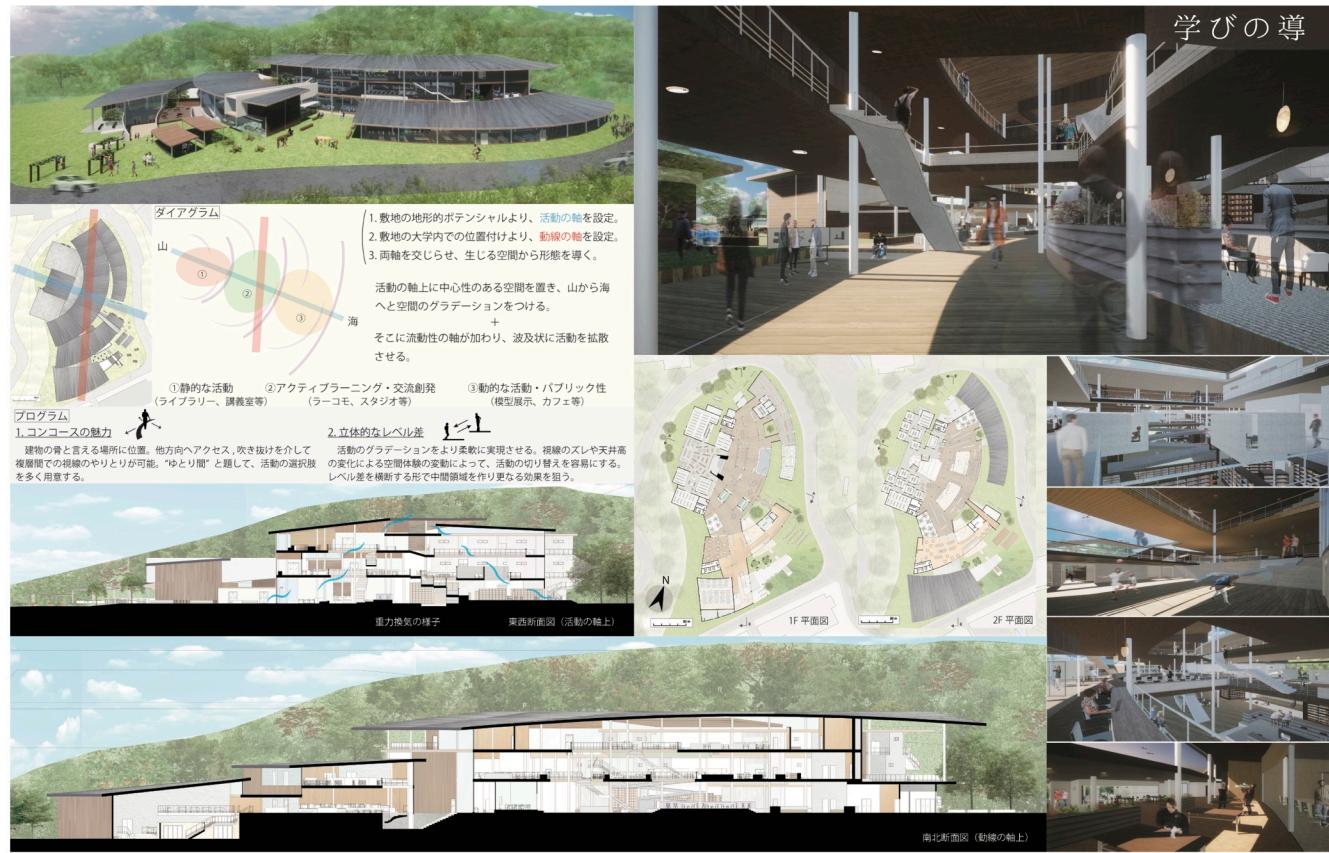
工学部生、他学部生の人の流れに加え、新たに地域の人の流れを組み入れ、3つの渦を作り出す。新たな磁場が生まれたこの場所に訪れる人は、建築学生の活動を見るだけでなく、流れ固有の体験をする。また渦という形態により、コロナ禍における新たな建築体験が可能になる。



学びの導

宇佐美恒

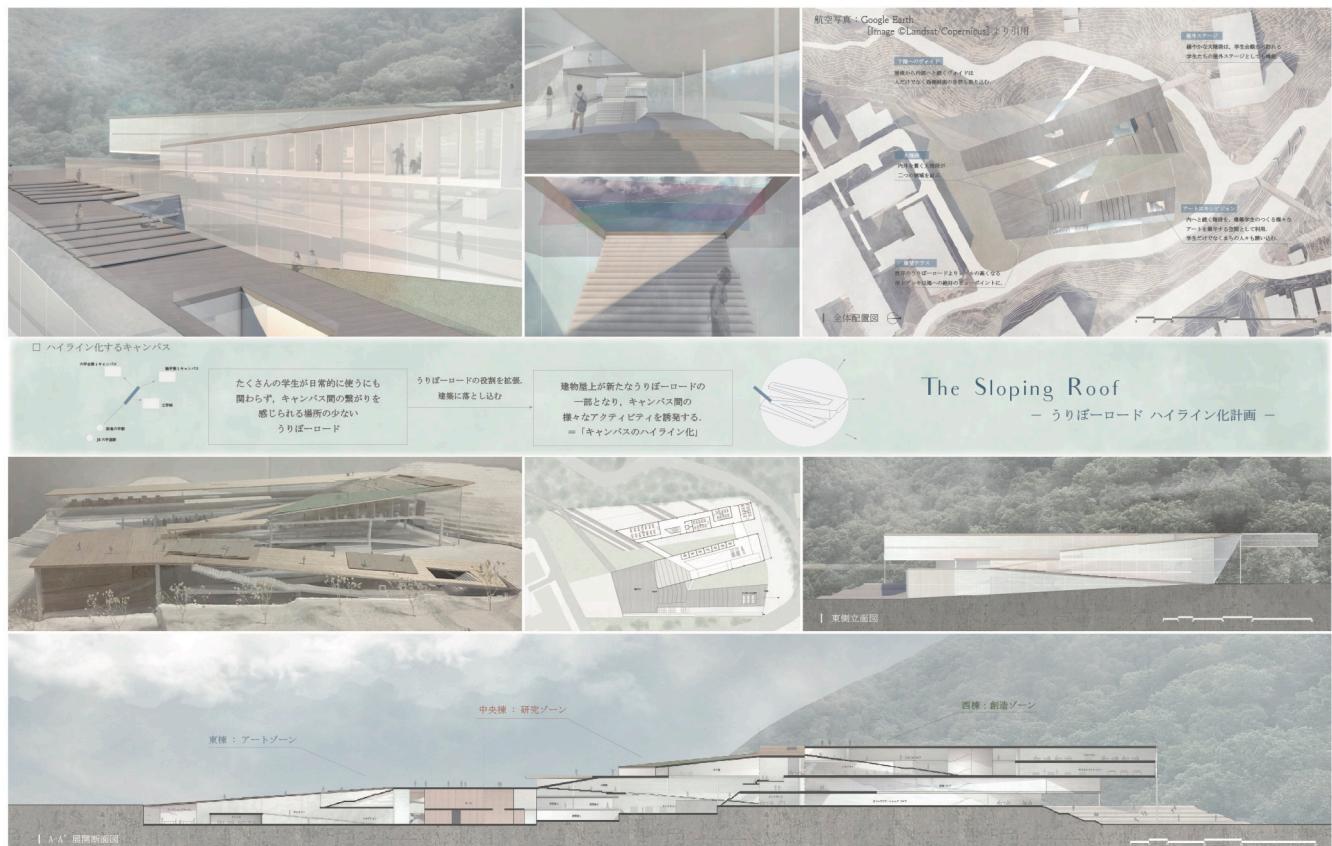
建築学生にとってその場所を学びの拠点と思える環境はどういったものなのか。みんながいる中に自分の場を位置付け、活動を起こしていることを認識できるように、他人の存在が見える空間構成を心がけた。学生間の多様な景色や交流、幅広い活動を通して個々人の学びのきっかけを見出してほしい。



The Sloping Roof – うりぼーロード ハイライン化計画 –

宮本莉奈

現在のキャンパスでは他の学生たちの様子が見えず、限られたコミュニティの中で活動が完結している。そこで、うりぼーロードのハイライン化と内外を貫く大きなスロープにより、学生たちの活動を可視化し、多様なアクティビティを創出する、新たなキャンパスの在り方を提案する。



思考の滞留

北脇知花

学生の学びに刺激を与えると同時に、自然が身近にある周辺環境を取り込んだ快適な空間を計画することを重視した。また、建設地の北東、南にある国文キャンパス、工学部キャンパスとのアクセスにも着目し、キャンパスを往来する人の動線を取り込むような配置計画とした。



とおる△

梶山彩花

現在、建築学生の活動は他学部生などの建築と関りのない人々からは見えない。雁行型を用いて視線を通りやすくし、敷地内を通るだけで建築学生の様々な活動が見えるように設計する。また、建築学生同士のつながりも雁行型によって生み出し、豊かな空間を作り出す。



*ベースの添景に一部 Skalgubbar (www.skalgubbar.se) のものを使用

繋ぐ、開く

劉亦軒

敷地が神戸大学の中に位置しているとも言えるため、建築学生と外界との交流を深める「場」としてだけでなく、各学部を結ぶ「道」にもなれるよう設計した。同時に、巨大な階段や屋外テラスを活用し、人々の視野を広げ、開放的な空間にする。

